

佳作

最高の弟へ

千葉県

木更津市立清見台小学校 五年

澤村 駿

弟は小学三年生。笑いを作り出す名人だ。いつも替え歌やダジャレを考え出しては、大声でつぶやいている。そのタイミングも言い方も絶妙で、ぼくたち家族はいつも笑わされる。でも、笑うためにハプニングや失敗も多く、母に、「面白い事をやつて笑いをとらなくてもいいから、もっと真面目にやりなさい！」と、よく言われている。

多くの学校では、一・六年、二・四年、三・五年が、ベア学年として遠足や芋掘りなどで一緒に行動することになっている。多くの場合、弟と二年間、ベア学年になるのだが、正直いうと気が重かった。家で弟の様子から考えると、何かハプニングが起きて、同級生からかわれそうだったからだ。

しかし、実際ベア学年として過ごしてみると、心配していたようなことは全く起こっていない。それどころか、「○○（ぼくのベアの子）がサッカーを始めたから、わくわくタイム（ベア同士と一緒に遊ぶ時間）にはサッカーをやつたら」などと、ぼくがベアの子を楽しませてあげられるようにいろいろ情報を集めてアドバイスしてくれたりもする。

また、ぼくと同級生に

「お兄ちゃん、家ではどんなことをしているの。」
などと聞かれたときも、ぼくが困るような事は言わなかったぞうだ。高学年にもなると、友達に話したくないことだつてある。そんなぼくの立場をわかっている弟ですごいな。と、ちよつと感動した。

思い返してみると、弟はいつもぼくをしたい、気をつかってくれている。

たとえば、マンガやテレビで面白い場面があった時、「ねえねえ、ここの面白くない？」

と同意を求めると、必ず、

「アハハ！ そうだね。」

と、笑ってくれる。

多くの具合が悪い時は、テレビを見やすい方に向けてくれたり、飲み物を運んでくれたり、氷まくらをかえたりしてくれる。

先日、ぼくが学校の宿泊学習で二晩留守にした時は、予定表を見ながら、

「いにい（お兄ちゃん）今なにしているかなあ。」

と何度も何度も言っていたらしい。

最近、母が、ぼくと同級生を何人か挙げて、だれが兄なら良いか、と弟に質問したら、弟はぼくが兄であるのが一番、と答えたぞうだ。

ぼくだったら、だれが弟ならいいだろう？ 何人か思い浮かべてみたけど、やっぱり今の弟以外は考えられない。

恥ずかしくてはつきりと言ったことはないけれど、口にださない気持ちには伝わらないから、今日は思い切つて言うよ。

「キミは最高の弟だよ！ これまでいつもありがとう。これからもずっとずっと仲良くしようね。よろしく！」